「家がいいね」第1号

いせ在宅医療クリニック　広報月刊紙

2004.5.20

おかげさまで、開院し2年になりました。この間の動きを、まとめてみました。出来れば毎月、現状報告も兼ねて続けようと思っています。

診療所の午前中は外来です

開院初日の最初で唯一の客（患者）は、「わたしは、うつです」と自ら言われ、詳しく聴き取るうちに気がつけば1時間もたっていました。今さら、追加の必要もないほど、検査も診察も繰り返し受けておられました。最後に「私たちの不慣れで時間をかけてすみませんでしたね」と言うと、なんとも言えない良い笑顔が戻ってきて、ほっとしました。実は、「十分すぎる医療」の中で、積み重なった不安をようやく少し解きほぐす手伝いが出来たのかなあと、後姿を見送りながら思いました。

以降、外来ではひたすらお客さんの話を聴き込むスタイルが続いています。身体のことでも心のことでも、症状と「戦っている」人たちが、ほとんど初めてのように自分の言葉で自分の症状を語られます。私は「症状とは、これ以上は無理をしないようにという、自らの身体や心からの大事な知らせですよ。消さなければと思わず、大切に思ってください」と話します。「症状」をあたかもガンのように打ち消すのに必死な「医療」の現状を、過去の自分の治療スタイルを反省しながら、考えずにはおれません。

午後は往診（訪問診療）に出ます

思い出すのは、４日目に直接に電話で、末期がんの高齢女性を、何とか自宅に連れて帰りたいという家族の相談が飛び込んできました。思い切って娘さんが「家に帰ろうか」と聞くと、複数のがんと脳転移のためほとんど話さない人が「うん」と答えたと言います。その晩には介護タクシーに看護婦が同乗し、私の車が伴走して、病院から自宅に帰りました。主治医に1ヶ月はもたないと言われ、点滴でむくんでいた身体は、自宅に戻ってから小康を示しました。そして、家族全員が力を合わせて、悔いの少ない別れを持つことが出来ました。

開院して本当に良かったと感じる時とは

「人生の最期は、自宅で過ごすものでありたい」という家族と本人の気持ちがあり、往診を医者が厭わなければ、自宅こそが最高のホスピスになるということを間近に経験できる時だと思います。

がんに限らず、死には基本的な違いはありません。恐れずに自分の、そして他人の死への関心を持つことが、その人の人生の輝きを増す条件であるように、私の現場では感じられてなりません。

ご案内です

6月13日（日）13時から
山崎章郎（ふみお）さんの講演会
「ホスピスケアへの気づき、ホスピスへの疑問、そして地域へ」
津市　三重大学　三翠ホールにて
当日券　千円　（クリニックにあります）

スタッフを紹介します

大西です。

倉野です。

西岡です。

中川です。

羽根です。

遠藤です。

Ise home care clinic
いせ在宅医療クリニック

自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県度会郡御薗村高向 927
電話　0596-20-8104
ファクス　0596-20-8105
mail homecare@kr.tcp-ip.or.jp
HP　http://tcp-ip.or.jp/~takuro